



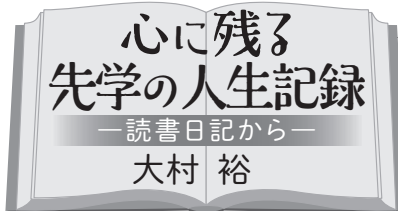
Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.199  
2020.4.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。



第15回

## 大塚初重編『考古学者・杉原荘介—人と学問—』

(明治大学考古学研究室 1984年)

杉原荘介博士(1913~1983年)は、戦前是在野の一学徒として力を蓄え、戦後は一気に学界の主流の一角を占めて華々しく活躍した学者である。本書は杉原の業績の紹介、座談会形式の回想談、人物像の紹介、友人・教え子たちの寄稿文、年譜・著作目録からなっている。ここではそれらを綴り合せ、在野時代の杉原荘介のあゆみをたどってみたい。

杉原荘介について紹介する前に少し先生に関する思い出話をさせて頂く。今まで紹介してきた諸先学には直接お会いしたことはないが、杉原先生とは体が触れ合うほど接近したことがあった。中央大学4年生の頃、国鉄(現JR)総武線の車中において、私のすぐ右隣にソフト帽を被った見覚えのある初老の紳士が腰を降ろした。それが憧れの杉原先生であったのである。体に染みついた煙草の香りがブーンと匂った記憶は今でも鮮明である。

私の憧れであった杉原博士はどのような人間だったのであろうか。エネルギーで個性的、かつ義理人情に厚い方であった。目標を据えたら、あらゆる困難をはねのけて着実に計画を推進する気迫を持っていた。それは、大学人として順風満帆な人生航路をたどってきた人ではなく、実社会の中で波瀾万丈の半生を送ってきた苦勞人だったからである。

杉原荘介は、1913年に東京日本橋に生まれる。本当は三男だったそうであるが、兄たちが早世したため、和紙問屋の杉原商店の跡取り息子として家業を継ぐ運命を担われたのであった。関東大震災(1923年)の折、難を逃れて市川市の平田町に家を移すが、ここが終生の住まいとなる。少年時から考古学への情熱を持っていたので、自然と市川市がその主たるフィールドとなったようだ。東京の府立三中(現両国高校)在学時には既に姥山貝塚や堀之内貝塚を発掘している。この頃、鳥居龍蔵の知遇を得、生涯の師として仰ぐことになる。中学を卒業すると、上級学校への進学は許されず(小林行雄によると、父君はかなり厳しい人であつたらしい)家業の手伝いに入るが、この頃森本六爾が主宰する東京考古学会に入会し、森本の知遇を得ることになる。杉原は、プライベートな場所でも鳥居と森本だけには「先生」と敬称を付けて呼んでいたそうである。

学業を終えた1930年代前半には、千葉県船橋市の飛ノ台貝塚(縄紋早期後葉)や市川市の須和田遺跡(弥生~奈良・平安)の組織的発掘を独力で推進。これらの概要報告を『史前学雑誌』4巻3・4号および『武蔵野』18巻4号、6号に公表している。以後杉原は、生涯をかけて全国の遺跡を発掘して回るが、そのほとんどについて律儀に報告書を仕上げている。この姿勢は非常に立派なことで、学者として私は心から尊敬しているところである。

1933年には東京外国語学校専修科(仏語)に入学し、その後も上智大学独語学科に入学している。これらの学校に入学することを、なぜ厳父から許されたのか理由は不明である。語学に非常に熱心だったのは、「井の中の蛙」になることをおそれ、海外の情報を積極的に取り入れよう

との意志の表れだったと思われるが、もう一つ理由があると私は考えている。それは、旧制高校→帝国大学を経た学者たちに負けまいとする対抗心があったのではないか、ということである。杉原は、語学に熱心に取り組むと同時に、論理学やカント哲学などに取り組む。旧制高校では、帝国大学への進学がフリーパスの状況(一部例外あり)の中で、受験勉強を意識せず、英語以外の外国語や哲学、論理学、文学などに取り組む気風があつた。杉原はこうした旧制高校的基礎教養を自らの努力で身につけたいという野心があつたように思われるのである。まさに「師」の鳥居龍蔵のように、自らの力で教養を組織的に身につけようとしていた訳である。杉原が鳥居と森本を師と仰いだのは、その学問だけではなく、独力で自分の学問を切り開いていった姿勢に共感したからだと思われる。

父君没後、青年社長となった杉原は1941年、明治大学文科専門部(史学科は夜間)に入学する。当時明治大学の教員であつた後藤守一との関係強化が狙いであつたと私は想像している。それはともかく、当時杉原はたくさんの優れた報告や論文を既に公表していたから、周囲の学生たちからは畏敬の念を以て迎えられたであろう。ちなみに仕事が終わると、わざわざ学生服に着替えて登校したという。卒業論文は、何と『原史学序論』であつた。

明大を卒業した直後召集令状が来て入営。この時杉原商店を解散した、と年譜にはある。幸いにして生還出来たら、学問の道を通る覚悟であつたのであろう。従軍中、あるいは捕虜収容所において、復員後の登呂遺跡調査計画を江坂輝弥に語っていたという。

敗戦後、1946年に復員して文部省嘱託教科書局に勤務。『くにのあゆみ』という歴史教科書の編纂に従事する。遠縁にあたる有光次郎文部次官の斡旋と、教科書の紙の確保を期待しての人事だと言われている。翌年には正式に「文部事務官」に就任。この年、明治大学の兼任講師となり、静岡県登呂遺跡の発掘にも参加。若年ながら(当時34歳)、会社経営で身につけた企画力・組織力・指導力をフルに発揮し、メキメキと頭角を現す。周囲の学者たちのほとんどは登呂遺跡のような大規模な発掘は初めてだったので、杉原の実務能力におびえる部分が大きかったであろう。そして翌年(1948年)には明治大学の専任の助教授となり、日本考古学協会の設立に尽力。学界の中枢に駆け上がる基盤を作ったのである。

最後に私が衷心より感動した話を他書から紹介する。1956年末、大塚初重氏(当時明治大学大学院博士課程在学)の母堂が急逝したことを杉原に電話で知らせると、「今晚お通夜なら俺行ってやるよ。ところで大塚、お葬式ってお金がかかるものだ。十万でも十五万でも必要な金額を言いなさい。持って行ってやるから」と言われる。これを聞いた大塚先生は、有難さに男泣きしたそうである(大塚初重『君よ知るやわが考古学人生』学生社 2005年)。親子三人暮らしの月収が「1万3800円♪」と歌われていたころの話である。

\*巻頭連載は隔月です。今回は鈴木正博さんです。

## 目次

|                                       |   |
|---------------------------------------|---|
| ■心に残る先学の人生記録 一読書日記から一 (第15回) 大村 裕 …1  | ■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト (第192回) 相馬勇介 …3 |
| ■考古学の履歴書 カナダで米寿をむかえました (第12回) 井川史子 …2 | ■考古学者の書棚 「古代東国の国分寺瓦窯」 浅野健太 …4           |

## 考古学の履歴書

## カナダで米寿をむかえました(第12回)

Fumiko Ikawa-Smith(井川史子)

## 12. マギル大学：人類学科と東アジア研究センター

1968年9月10日に京都で終了した第8回国際人類学・民族学会議からモントリオールに戻ったときはすでに新学年がはじまっており、息をつく暇もなく新任客員助教授としての授業にのぞむことになった。実は会議に出かけれる前の春学期にハーヴァード大学での先輩のソールスベリー博士担当のコースの一部を代講していたが、この度は研究休暇で不在となるブルース・トリガー博士担当のコースを代講するフルタイムの客員教員として、「人類学入門」(Introduction to Anthropology)のコースと「世界の先史文化」(World Prehistory)と題するコースを受け持つことになった。その後、人類学科が社会学から独立した1970年に、正規教員となり、2003年12月に引退するまで、東アジア、特に日本の先史考古学、其の延長として、北東アジアから北米への人類拡散の形跡をたどることなどに焦点を置いた研究と学生の指導に従事した。

「人類学入門」は広義の人類学の概観で、最初の秋学期は霊長類の進化からはじまって、化石人類・石器文化の発展と拡散、旧石器・新石器時代を経て古代国家の出現、歴史時代のはじまりまでを扱い、冬休暇後の春学期には世界各地の民族の文化と社会について社会人類学の観点から概観するコースだった。これは人類学を専攻する学生には必須科目だが、人類学以外の学科を専攻する学生たちも人文系、理科系、にかかわらず一般教養の選択科目として登録するので、正確な記録は見つからないけれども聴講者は数百名だったと思う。大講堂にあふれるような聴衆を相手に講義するのは新米の教員ではなく、学生相手の講演になれた大先生の方が適当だとおもわれるけれども、何百名もの登録となると講義や採点ばかりでなく、事務的な仕事にも時間がかかるし、人類学の初歩的な概説は多くの研究者にとって魅力的なトピックではないということもあって、大先生がたは「人類学入門」のような大型コースを回避されるので、新任の教員の受け持ちになることが多い。筆者自身、数年後に若手の同僚が赴任してくると、そちらにお譲りした。

1968年はマギル大学理事会が東アジア研究センターの設立を決議するなど、本学で東アジアに関する研究と教育が正式に発足した年だった。その背景としては、1964年のオリンピック、新幹線開通などにみられる戦後日本の復興ぶりが国際的に注目されたこと、中国については1965年から展開した文化大革命、1970年に成立したカナダと中国との外交再開への交渉過程など、1960年代はカナダ人の東アジアに関する関心が高まりつつあった。マギル大学はすでに1930年代に中国文明に関するコースを設けていたということで、この分野については先駆者だとされているが、マギルと中国との関係についてはノーマン・ベチューン(Norman Bethune)を中介とする縁がある。トロント出身の医師ベチューンは1920年代の末から1930年代の半ばにかけてマギル大学のロイヤル・ヴィクトリア病院で医療技術を学び、その後も同病院で技術・器具の改良と開発に従事していた。1935年にカナダ共産党に入党し、1938年には中国にわたって負傷兵や土地の住民の治療にたずさわった。その医療活動中に指を切ったことから敗血症に罹って1939年に延安で亡くなった。彼の業績を毛沢東自身が讃頌した弔辞

「紀念白求恩」(「ベチューンを記念する」)は文化大革命の時期に広く読まれたとのことだ。モントリオールのダウンタウンにはベチューン広場と命名された広場があり、中華人民共和国からモントリオール市に寄贈されたベチューンの像が置かれている。

1960年代には、マギル大学の歴史学科では世界史の一端として「中国と西欧」とか「ソ連と中国」といったコースを提供しはじめた。これが大変好評だったので、1960年代の後半には東アジア関係の部門を強化するために、歴史学科の教員陣に中国史専攻の教員2名と日本史の専攻者1名を加えることになった。日本史担当の助教授としてお迎えしたのは、カリフォルニア大学のバークレー校で博士課程を修了されたのちペンシルベニア州のバックネル大学で講師をしていられた馬場伸也氏で、のちに阪大法学部教授、国際政治学者として多くの業績を残された方だった。1960年代末には、マギル大学の人類学科に1968年に加わった筆者の他にも英文学科、独文学科、美術学科、経済学科、政治学科、生化学などに、東アジアの文化・社会をそれぞれの立場から研究対象としている教員やアジアの研究者との交流に関心のある科学者などが、かなり増えていた。これらの研究者の意図を助成するために文理学部内に「東洋文化委員会」が創設され、これが何度かの改名をへて、「東アジア研究諮問委員会」として継続している。そのいっぽう、先述の通り、一段上の大学全体のレベルで、評議員会と理事会の決議によって東アジア研究センター(Centre for East Asian Studies)が正式に発足し、アジア研究に不可欠な言語能力を養成するために東アジア言語・文学科(Department of East Asian Languages and Literatures)も設置された。

1968年12月には新設の東アジア研究センターの運営委員会の第一回のミーティングが開かれ、東アジア研究プログラムの構想を練るための委員会を作ることがきまって、私もその委員会に加わるよう招待された。これがマギル大学における東アジア研究へのかかわりのはじまりだった。これより何年か先には私自身が、東アジア研究センター長、東アジア言語・文学科長を務めることになる。



▲モントリオール市、ベチューン広場のベチューン像  
撮影者：フィリップ・スミス

| 略歴                    |   |
|-----------------------|---|
| 1930年                 | 神戸市長田村房王寺谷【現在：神戸市長田区房王寺町】に生れる               |
| 1948年                 | 奈良女子高等師範学校附属高等学校卒業【現：奈良女子大学付属高等学校】          |
| 1953年                 | 津田塾大学英文学科卒業                                 |
| 1953-54年              | 東京立大学【現：首都大学東京】社会学研究室助手補                    |
| 1954-55年              | 東京立大学大学院社会科学研究所(社会人類学専攻)修士課程                |
| 1955年                 | フルブライト奨学生としてハーヴァード大学に留学                     |
| 1958年                 | ラドクリフ大学(ハーヴァード大学の女子部【現在ハーヴァード大学に合流】)修士(人類学) |
| 1958年                 | ラドクリフ大学 博士課程終了(人類学)                         |
|                       | 1974年にハーヴァード大学人類学科に博士論文を提出、PhD授与            |
| 1964-66年              | トロント大学人文学部人類学科 非常勤講師                        |
| 1967-69年              | マギル大学人文学部人類学科 非常勤教員                         |
| 1970-2003年            | マギル大学人文学部人類学科 専任教員;2009年以来名誉教授              |
| 1999-2000, 2004-2007年 | カナダ日本学会会長                                   |
| 2004-2012年            | 東亜考古学会会長                                    |
| 2005年                 | 瑞宝小授章                                       |
| 2017年                 | カナダ日本学会ライフタイムサービス賞                          |

隔月連載です。次回は間壁忠彦先生・間壁霞子先生です。



## Uレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 192

#### かぶと塚古墳 ～大阪府堺市～

相馬 勇介

私が紹介するのは、遺跡の情報を正しく漏れなく回収し、それを客観性のあるデータとして報告することの重要性、またそれに取り掛かる時の心得を改めて教えてくれた、かぶと塚古墳である。

かぶと塚古墳は、大阪府堺市北部に位置する百舌鳥古墳群の内の一つの古墳であり、大阪府堺市西区上野芝町に所在する。古墳のプロフィールは、第1次発掘調査(鹿野1991)や開発に伴う確認調査などによって概ね判明している。墳丘形態は前方後円墳あるいは帆立貝形古墳、全長は推定約50m、築造時期は不明であるが周辺の状況から5世紀前半でも初めの頃と推定される。東方約50mには5世紀初め頃までに築造された墳丘長168mを測る大塚山古墳がある。

なお、百舌鳥古墳群は、大山古墳(「仁徳天皇陵古墳」)やミサンザイ古墳(「履中天皇陵古墳」)、ニサンザイ古墳といった墳丘長が300mを越える巨大前方後円墳を頂点とし、他に大小様々な形態の古墳によって構成される古墳群である。古墳群としての流れは、4世紀後半に石津川下流域、標高の低い低地部における前方後円墳の築造を端緒とし、5世紀を通して信太山台地上で巨大前方後円墳が盛んに築造され、6世紀前半には終焉を迎える。かぶと塚古墳は、約200年間続く百舌鳥古墳群の前半段階に築造された古墳と位置付けることができ、大塚山古墳との関係から百舌鳥古墳群の成立・展開を考える上で重要な位置を占めることは言うまでもない。

かぶと塚古墳の現況は、後円部後半が道路と住宅によって失われており、後円部前半～前方部が良好に残存している。周辺ではこれまで10基に近い大小様々な古墳が破壊され、現在ではその姿をほとんど確認することができない。かぶと塚古墳はそうした環境下にあっても、現代まで墳丘が残されてきた貴重な遺跡である。

平成31(令和元)年に墳丘を含む敷地で庭等造成工事が施工され、私は同年4末～5月末にかけて計16回の立会調査を行った。立会調査は、まず日々様々な現場に赴く際できるだけ古墳の前を通り工事の進捗状況を把握することから始まり、様々な工事のタイミングで、持ち歩いていた手ガリ・コンベックス・コンパクトデジタルカメラなどを使って簡易な調査を行い記録することに努めた。調査の結果幾つかの重要な成果を得た。



▲円筒埴輪検出時の立会調査風景  
(中央左に墳丘に上る重機、中央右に応援に駆けつけてくれた職員が見える)

一点目は、墳丘盛土の土層断面の観察を行い、盛土工法の一部を伺えたことである。部分的な観察に留まるが、少なくとも後円部の墳丘は、現在の生活面より約60cm高い位置で検出した地山直上に、二段階に亘って供給元の異なる土をブロック状の土塊で積み上げることによって盛土していることを確認した。このことから、かぶと塚古墳においても、古墳時代中期以降に列島の間に盛行した盛土工法が採用されていたことが分かった。

二点目は、樹木の伐根工事によって、前方部端で原位置を留めた円筒埴輪を検出したことである。円筒埴輪は底部～第一段目突帯までが掘方に収まっていた。また、これ以外に樹木の根系に多量に絡んだ円筒埴輪片があり、その場所を推定するなどして、円筒埴輪列の復元も行うことができた。かぶと塚古墳における初めての円筒埴輪列の検出である。

現地調査を終えて、これらの資料をなんとか活用できる方法はないものかと考え、職場に相談し、報告書を作成する体制を整えた。また、出土遺物の検討に際しては、暫定ではあるもののかぶと塚古墳の築造時期を決定するという決断が求められる。古墳時代の勉強が不十分である私にとっては十分な検討ができないと考え、埴輪検討会に協力を依頼し多くの研究者に御教示を賜った。検討の結果、埴輪の時期は十河編年Ⅲ期(十河2003)の範疇に収まり、大塚山古墳から出土した埴輪(樋口1989)の時期と基本的には同時期であると考えられた。最終的には、古墳時代中期の前半段階、5世紀前葉に帰属することは間違いなく、大塚山古墳とそれほど時期差なく築造されていたことが分かった(相馬2020)。

学生時代には遺物の接合作業を何度も行う中で、遺構・遺物には真摯に向き合う姿勢が必要であること、遺物にはそれぞれ十人十色の性格や表情があるなど多くのことを学び、また様々な方の教示を賜り現在に至る。現職に就き3年目の若輩者ではあるが、遺跡との向き合い方を、かぶと塚古墳は改めて教えてくれた。また、遺跡の保護・活用には事業主の多大なる協力が必要不可欠であることも身をもって学んだ。今後もこの経験を忘れず、常に心に留め、遺跡には真摯に向き合っていくと思う。



▲原位置を留めた円筒埴輪の出土状況



▲円筒埴輪

#### 参考文献:

- 鹿野吉則1991「かぶと塚古墳発掘調査報告」[平成2年度国庫補助事業発掘調査報告書]堺市教育委員会
- 相馬勇介2020「かぶと塚古墳の調査-KBT-3の調査-」[百舌鳥古墳群の調査]14堺市教育委員会
- 十河良和2003「和泉の円筒埴輪編年概観」[埴輪論叢]第5号 埴輪検討会
- 樋口古文1989「百舌鳥大塚山古墳発掘調査報告-前方部北西コーナーの調査」[堺市文化財調査概要報告]第40集 堺市教育委員会

※写真は相馬2020より転載。

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは柴田拓也さんです。

## 考古学者の書棚

## 「古代東国の国分寺瓦窯」

須田勉・河野一也編／高志書院(2019)

浅野 健太

国分寺は天平13(741)年に聖武天皇の詔により、全国に建立された官寺である。戦前から多くの国分寺で発掘調査がなされ、それまで各国で建立された氏寺を凌ぐ大規模な伽藍が明らかとなってきた。しかし、こうした大規模な寺院を建てるのが困難であったことは、国分寺の造営を督促する詔が度々発せられていることから明らかだ。地方社会では、このような未曾有の大規模プロジェクトに対応するため、従来の労働力の編成方法を転換させ、この計画を実現したとみられる。

こうした労働力や組織の編成過程を考古学的に検討するうえで良好な資料となるのが、国分寺から大量に出土する瓦を焼成した瓦窯や瓦である。国分寺を造営するうえで大量に必要となる瓦を、窯場ではどのように組織を編成し、生産を行っていたのか、瓦窯の検討により明らかとなってくる。

本書は近年発掘調査が進展した東国の国分寺瓦窯について、「東国古代遺跡研究会」と「窯跡研究会」の合同で調査研究成果の発表を行ったシンポジウム「関東甲信越地方の国分寺瓦窯」の成果をまとめたものである。

## 本書の構成

全体は2部構成で、国分寺瓦窯研究の視点や、東国国分寺瓦窯の最新の調査成果がまとめられている。

## 第1部 国分寺瓦窯の視点

国分寺瓦窯に関する諸問題(梶原義実)

瓦窯の構造(木立雅朗)

奈良山窯跡から見た国分寺瓦窯(大坪州一郎)

有畦式平窯焼成技術論(藤原学)

瓦生産における燃料材の用材選択(高橋敦)

## 第2部 東国の国分寺瓦窯

横須賀市 乗越瓦窯(中三川昇)

町田市 瓦尾根窯跡(高橋香)

市原市 川焼・神門・南田瓦窯(鶴岡英一)

市川市 北下瓦窯(今泉潔)

松山瓦窯跡・瓦塚窯跡(小杉山大輔)

信濃国分寺瓦窯跡(柴田洋孝)

南多摩窯跡群の瓦窯(竹花宏之)

南比企窯跡群の瓦窯(手島芙美子)

東金子窯跡群の瓦窯(宮原正樹)

上野国分寺の瓦窯(出浦崇)

台原・小田原窯跡群(藤木海)

東国の国分寺瓦窯研究(浅野健太)

第1部では瓦窯研究の諸問題について、各執筆者の論考が納められている。梶原氏は全国の国分寺瓦窯と瓦について、国府と国分寺の瓦生産の相違、東海甲信越地域と九州地域での有畦式平窯の導入と展開について論じた。

木立氏は瓦窯の傾斜角度と煙道、井構造に着目して平窯と登窯の焼成能力について論じた。平窯での傾斜角度の分析と

いう新たな研究視点が提示された。

大坪氏は平城京各施設の瓦を生産した奈良山瓦窯跡の窯構造の変遷と、有畦式平窯の出現を論じた。

藤原氏は有畦式平窯の構造を整理し、分焰柱の本数、天井の構造、煙道の有無による構造の変遷を論じた。

高橋敦氏は瓦窯出土の炭化材の樹種同定を行い、瓦焼成時の用材選択について論じた。特に南比企窯跡群での瓦窯と須恵器窯の燃料材に大きな差はみられず、似たような用材選択であったことを指摘した。窯の焼成時間は燃料の種類によっても左右されるはずであり、考古学的手法では検討が難しいこうした問題を、自然科学的手法で検討した意義は大きい。

第2部では相模・上総・下総・常陸・信濃・武蔵・上野・陸奥などの東国国分寺の瓦窯の最新の調査成果や、研究成果が論じられている。こうした瓦窯の調査成果が一冊にまとめられているのは、大川清博士の「日本の古代瓦窯」(1972雄山閣)以来多くないので、貴重な成果である。

付として筆者も東国における国分寺瓦窯研究の研究史をまとめた。瓦窯は丘陵の斜面地に築かれることが多いため、遺跡として認識されず、開発に伴う工事中に発見され、緊急的に調査されるケースも少なくない。しかし、戦前からの詳細な分布調査により、瓦窯の分布が把握され、戦後の大規模開発の際も事前の発掘調査により、多くの遺跡で記録保存がなされてきた。先人達の努力のうえで現在の研究が成り立っていることを改めて感じた。

## これからの国分寺瓦窯の研究と活用

本書では東国の国分寺瓦窯について論じられているが、東国国分寺での造瓦体制における特色として古くから議論されているのが、文字瓦の問題である。上野・下野・武蔵・陸奥といった文字瓦が多数出土する国と、それ以外の文字瓦の出土が限定される国に分かれることは古くから議論されている。文字瓦の性格について「知識物」とする説と「律令税制物」とする大きく2説が挙げられているが、現在も決着はついていない。本書で取り上げられた各国の瓦窯と出土遺物を詳細に分析することで、こうした問題が明らかとなるであろう。

一般の方や、歴史ファンの多くは貝塚や古墳、城郭といった考古学の王道ともいえる遺跡に興味はあっても、瓦窯に興味をもつ方は多いとは言えないと思う。しかし近年では、国分寺瓦窯の史跡指定や、既に史跡となっている国分寺の附としての追加指定も進められている。今後は国分寺との一体的な保存活用、整備により瓦窯の魅力を発信できることを期待したい。

## アルカ通信 No.199

発行日 2020年4月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp